

## 第五章

### イスラーム初期におけるオマーンの人々の貢献と

#### 彼等の中の著名人に関する言及において

(p. 142) これをもって、神の御心により、オマーンの歴史第1部が完了する。

オマーンの人々はイスラーム教徒達の前で価値の有る様々な徳を有していることを知るが良い。既に預言者は彼の人々を引き付ける彼の言行録（ハディース）においてそれを確認している。そして最初のカリフ、神が彼を嘉し給わんことを、彼がそれを目撃し、そしてアラブの高位なる者達が彼等の学派が様々でありながらもそれを確認していた。

そして無知で愚かな者や下劣で妬む者以外はそれを否定しないのである。そして虚偽の人々以外はその真理を否定するであろうか？そして真理の人々にとって、真理をその人々以外が知ることがあるか？つまりオマーンの人々は自らイスラームに改宗したのであり、神の使徒に支援したのであった。彼等は彼を見た事もなかったし、離反したこともなかった。つまり彼（神）に耳を傾け、そして彼の使徒に対して、彼等の家の遠さや彼等の数の多さにもかかわらず、服従したのであった。

一方で彼の一族や彼の係累の子孫達は彼（預言者）に敵対し、遂に彼等は彼の祖国から彼を放逐し、そして彼に敵対する事において、神からの善き事（イスラーム）が先んじていた者達の中で神が望まれた者達以外と連帯したのであった。同様に殆どのアラブ人達は彼の命令に敵対の意を表した。そして彼等が目で見ただけの彼の様々な奇跡に嫌悪を表した。つまり彼等はユダヤ人達よりも手厳しい者達だった。

一方でオマーンの人達は彼の使者に歓迎と歓待の意を述べた。そして彼に彼等の諸事の手綱を渡した。そして彼等は彼の呼び掛けに対して誠実な布教者となったのであった。そして彼の布教者達に対して彼の右腕となった。そして彼の命令に対して服従し帰依する者になった。つまり彼等の中の誰も、彼の生涯の間、神が愛する善行と神への彼等の倫理観念が明らかである美德以外を見なかったのであった。

つまりそれ故に彼（ムハンマド）は言ったのである。「神が大地の人々に慈悲を垂れ給わんことを。彼等は私を見たことがなく、私を信じている。これは神の使徒からの、彼等の徳に対する最も大きな証明である。

そしてアハマドはアブー・ルバイドの系統から語った。そして曰く。「彼（アブー・ルバイド）は言った。バイルジュ・ブン・アサドと言われる男が我々の処から出て行った。すると（第2代カリフ）ウマル・ブン・ハッターブ、神が彼を嘉し給わんことを、彼が彼を見かけた。そして言った。「汝は何処の出自か？」彼は言った。「オマーンの民の一人です」。するとウマルは彼を（第1代カリフ）アブー・バクル・アッシディーク、神が彼を嘉し給わんことを、彼の元に導いた。そして彼は言った。「この者は、私が神の使徒が(P. 148) 其処には如何なるものがある、と言っているのを聞いた大地の人々の一人である」。

「私はオマーンと言われる土地の事を知っている。其処の片端には海がしぶきを立てている。もし私の使者が彼等の元にやって来たら、彼等は彼に槍や石を投げることはしないであろう」。

既に神は彼（ムハンマド）が彼等に関して思われていたことが、正しいとされた。つまりアムル・ブン・アルアースが彼（ムハンマド）の元から使者として彼等の元にやって来た。そして彼は彼等から善行以外を見ることは無く、また同様に彼等については、彼を喜ばせる善き事以外は彼等から聞かなかった。（ハディース集）ムスリムに、アブー・バルザフ・アルアスラミーのハディースに下記のものがある。曰く「神の使徒はある男を或る民の元に送った。すると彼等は彼を虜にしてそして殴打した。それから彼は神の使徒の元に戻って来た。すると使徒、彼に祝福と平安があらんことを、彼は、もし汝がオマーンの民の元に行ったのであれば、汝を虜にせず、殴打もしなかったであろう」。

つまり貴方は神の使徒が、彼等を慈悲深い純粹さの代表として挙げ、そしてこのことにより彼等を名誉と仁徳の者として考慮しているのを見るであろう。

マーゼン・ブン・グドゥーバ・アッサアディーのハディースにおいて彼は言っている。「私は言った。嗚呼神の使徒よ、オマーンの民に何か祈って下さい」。すると彼は言った。「嗚呼神よ、彼等を導き給え、そして彼等に報酬を与え給え。それから私は言った。「嗚呼神の使徒よ、私にもっと（祈りを）下さい」。すると彼は言った。「嗚呼神よ、貴方が彼等に対して評価したもので、彼等に美德と充足と満足の報酬を与え給わんことを」。

つまりオマーンの民は、美德と言う意味全てにおいて、人々の中で一番知られていたのであった。そして彼等は人々の中で一番、充足さと満足を納得していた人々であった。（この事は）神が彼等に誓ってやった事によってのことであり、彼等以外の他の者達とは違っていたことによる。これらの者達は多産が彼等を喜ばせ、豪華な家具が彼等を魅了する者達であった。

マーゼンは言った。「私は言った。嗚呼神の使徒よ、海が我々の方角（別の伝承では、我々の側）で水しぶきを上げています。故に我々の糧と偶蹄目と奇蹄目の家畜に関して、神に祈って下さい」。すると（神の使徒）、彼に祝福と平安があらんことを、彼は言った。「嗚呼神よ、彼等に対して、彼等の糧を広げ給わんことを。そして彼等の海から彼等の良き物を増やし給わんことを」。それから私は言った。「嗚呼神の使徒よ、私にもっと（祈りを）下さい」。彼は言った。「嗚呼神よ、彼等以外の者からなる敵をもって彼等を支配することのないように。嗚呼マーゼンよ、アーメンと言いなさい。アーメンは彼（神）の、御許において祈りに応えてくれるものである」。マーゼンは言った。「私はアーメンと言った」。

と言う訳で偉大で崇高な神は彼の恵みと徳で、オマーンの民の為に彼の預言者が祈った事に応じた。そして彼の祝福が彼等の間で、否認されることもなく現れた。

マーゼンは言った。「翌年のことであったが、私は神の使徒の処を訪れた」。即ちオマーンの使節として私は彼の処に戻った。それから彼に、神が使徒の祈りの祝福の中で、彼等に対して恩恵下されたものを伝えた」。 (P. 144) それ

から私は言った。「嗚呼祝福された者達の中の祝福された者よ、善き人々の中の善き人よ。神は既にオマーンの民の中の或る民族を正しき道へと導かれました。そして彼等に対して貴方の宗教を恩寵として授けられました」。

また私（イマーム・サーリミー）は言った。「恐らく彼はアムル・ブン・アルアースの手によって改宗した人々の事を指摘したのであろう」。

それからマーゼンは彼等について語った。彼は言った。「貴方様はオマーンに良き肥沃さを与え、そこにおける利益と漁を多くされました」。すると（預言者）彼に平安があらんことを、彼が言った。「私の宗教はイスラーム教である。神はオマーンの民に肥沃さと漁を増やされるであろう。私を信じる者は誰であろうが至上の祝福あれ。そして至上の祝福あれ。それから私を信じる者で私を見たことが無い者、そして私を見た者を見たことが無い者でも誰であろうが至上の祝福あれ。そして神がオマーンの民に対してイスラームを増し給わんことを」。

即ちオマーンの民の中にイスラームが広まり、彼等の中で普及するように、ということである。つまりこの事が彼の言葉の正しさの例証であった。それは彼の預言性を示す彼の奇跡の1つなのである。

イマームのアブー・ヤアコーブは、イマームであるアッラビーア・イブン・ハビーブの伝承（ハディース）に関する物語集からなる（彼の書）「ムスナド（ハディースの伝承人物に対する依拠）の付録」において、彼の師デアラブー・スフィヤーン・マフブーブ・ブン・アッラヒール・アルクルシーアルマハズーミーからの聞き伝えでイスラーム教徒の中で最も腰の曲がった男のことについて語った。彼等に神の慈悲があらんことを、そして彼等を嘉したまわんことを。

（曰く）「オマーンの人々の女性達の或る女性達が、信者達の母であるアーイシャ、神が彼女を嘉し給わんことを、彼女に面会の許可を求めた。彼女は彼女達に許可を与えた。それから彼女達は彼女に挨拶をした。

或るハディースによると、彼女が彼女達に挨拶をした、とある。そして彼女は言った。「貴女達は何処の出身ですか」。彼女達は言った。「オマーン民の出です」。イマーム（アブー・ヤアコーブ）は言った。「彼女は彼女達に言った。私は愛する人（預言者）が、オマーンの民から私の居る処に来訪者が多からんことを、と言っているのを聞いたことがある。

この事に関してまたイブン・スフィヤーンから聞き伝えたアッラビーヤの諸伝承の中に次のものがある。彼（イブン・スフィヤーン）は言った。「ジャービル・ブン・ザイドがアーイシャ、彼女を神が嘉し給わんことを、彼女の元を訪ねた。そして彼は近付き、以前に彼女に尋ねた事も無い様な諸問題について彼女に尋ねた」。即ち彼女から知識を得るために、彼女に対して非常に沢山の繰り返しを行った。

つまり彼女は彼（ジャービル・ブン・ザイド、彼を神が嘉し給わんことを）の師達の中で最も偉大なる者の一人であるからであった。彼は彼女に預言者との性交渉について尋ねた。その折、彼女の額は汗を流しながら、彼女は言った。「尋ねなさい、我が息子よ」。それから彼女は言った。「貴方は何処の出身なのか？」

即ち彼女は、彼がこの様な種類の事まで、質問に関して大袈裟に行うのを見た時、即ち彼はかつて彼女に対して、性交渉の導入部についての質問を無制限にしていたのであった。例えば口付けや(P. 145)それに類するものについてである。また同様に彼女は言い続けた。「預言者は我々に彼が断食していても、口付けをした」。

また別の伝承では次の様に（彼女は言った）。「貴方達の中で誰が神の使徒の様であるのでしょうか。彼は彼の望みを最も持たれる人なのです」。そして彼女が彼に「貴方は何処の出身なのか？」と言った時、彼は彼女に対して、オマーンと言われている国の日が昇る地域の民の出です」と言った。

彼（イブン・スフィヤーン）は言った。「つまり彼女は彼に対して私が暗誦していない事を彼に述べた。但し、彼女が次の様に述べたと思う。彼女は言った。預言者が私にその事を述べ、そしてこの件に関しての諸々の事柄を述べたと、私は思う」。

アブー・イスハークは言った。「言いたいことは、彼は性交渉の導入部について許される質問を彼女に対して為した、ということであり、それ（質問）から（預言者）神が彼を嘉し給わんことを、彼の言葉を伝播し、収集することを強く望んだ為であった。（それは）ムスリムが神の使徒の全ての行為を、詳細に威厳を持って真似をする為であり、性交渉そのものについての質問ではなかった。つまりそれに関する質問は許されてはいないのであった。そしてもし許されない質問を彼がした場合、彼女は彼を制したであろうし、宗教においても（それは）寛容ではないのであった。

そしてこの件に関しては、既に彼女への質問者に対して彼女の言葉が知られている。「汝の母に質問した事を私に質問しなさい」。即ち汝は、汝の母に質問する事が許されている事について私に質問しなさい、ということである。

そしてイマームであるアブー・アッシュアサー、神が彼に慈悲を垂れ給わんことを、彼に関して批難を述べる者達の言葉は「彼はそれ（性交渉）に関心を向けなかった」。と言うものであった。つまりジャービル・ブン・ザイドはイスラーム法の最も権威のある学者達の一人であり、スンナ（奨励行為）を導く師達の一人である。即ち彼は彼等全てから（法やスンナを）継承した。そして彼等は彼を選ばれるに（値する）資格を持つ者と見做した。そしてそれらの公正さや正確さで彼等は一致した。

このハディースに対して詳しく述べる者達のある者達の否認は、彼等に帰する事である。つまりそのスンナの全ては、その源が彼等（のみ）であるのではないし、もしくは彼等から（出典されて）以外は正当性がないのである。

つまり如何に多くの事を最初の者はそれ以外の者に残したことであろうか。そして如何に多くの人々からのその叱責があったことか。彼等の中には彼が生存した時を共有して生きて来た者はいて、そして彼等の中には死んだ者達がいた。

そして筆記者達は、彼等が書き写したものを如何に多く忘れてしまったことか。そして或る特定の民族、もしくは或る種の個々人達においては、知識が制限されてはいなかった。つまり彼等の元にあるものは依拠されるものから生じているのである。即ち神の使徒は言われた。「我が主はイスラーム法をもたらされるお方であり、彼は法学者ではない。そして我が主はイスラーム法を、或る者より法学をより理解者する者にもたらされるお方である」。つまりこの様な事なのである。

また次のハディースも同様である。「貴女の処にオマーンの翁が来るが、彼に宗教の全てを教えて、そしてそれを与えなさい。と言うのは、彼は私が死んでいるのを知るからである」。数々の伝承においては、これは不思議なことではないのであるが、そしてそれ（前述のハディース）の最後に「嗚呼、私は貴女を愛している。信者達の母よ」。(P. 146)彼の言葉に依ると「もし汝達の一人が汝の同朋を愛するのであれば、彼（ムハンマド）は彼を愛していると伝えよ」ということになるのである。すると（アイシャ）彼女を神が嘉し給わんことを、彼女は言った。「私も同じように貴方を愛しています」。それ（ハディース）は言った。「それから彼は彼自身を叱責した。そして彼は彼女に言った。「私は神の中において、貴女を愛しているのです」。

また同様に神の使徒は2人のアンサール（マディーナに居てメッカからの移住者を支援した人）に次の様に語った。それは彼等がモスクの周囲を通り掛かり、神の使徒が彼の妻の方に頭を垂れて、彼女が彼の髪を梳くのを見、彼がモスクで熱心に祈っていた時のことであった。つまり彼等がこの状況にある彼を見た時、神の使徒への畏敬と彼と彼の妻に対する尊敬から急いで歩き去った。

それから彼が（祈りを）終えた時、2人を呼んだ。そして2人がやって来た時、彼は2人に言った。「彼女は彼の妻達の中の1人である」。すると彼等は言った。「嗚呼、神の使徒よ、貴方でさえ、（そうなのですか）」。すると彼は言った。「悪魔はアダムの子孫の中で血の流れの様に流れている」。即ち私は、汝達2人を悪魔の呪いが誘惑することによって、想念を害し、それで危険に陥るのではないかと、怖れたのだ。

つまりムスリムに対する邪念は、イスラームの大罪の中の最も大きなものの1つである。ましてや神の使徒に対するものは、如何なるものであろうか？邪念は、諸罪の大罪の中の大きい罪である。そしてジャービルが彼女（アイシャ）に言い過ぎた時、彼女は彼を叱責した。つまり彼女はこう言った。「貴方は私が神以外のものにおいて、貴方を愛していると思っているのか、隻眼の者よ」ジャービル、神が彼に慈悲を垂れ給わんことを、彼は隻眼であった。

神の使徒は言った。「宗教は奇妙に始まり、始まりのように奇妙に戻ってくる。故に私の共同体の見知らぬ者達を祝福せよ」。人々は言った。「嗚呼、神の使徒よ、見知らぬ者達とは誰なのですか？」彼は言った。「神の書が放置される時に、神の書を知っている者達である。そしてイスラームの綱が断ち切られる時、それを握り締めている者達である」。イマームは言った。「ムハンマド・ブン・アハマドは言った。見知らぬ者達はオマーンの民である。神の使徒の教友達を見ることが、楽しみになる者であれば誰であろうが、オマーンの民の中の行い正しき者達を見せしめよ」。私は言った。「（次の様に）言った者が彼等のことを指摘している」。

「王達は高貴であらんことを。彼等は彼等の倫理の上にいる預言者達であり、つまり貧困が彼等の王冠なのである」。

幾つかのオマーンの手紙には、次の様にある。「神の使徒は言った。稼ぎが難しい者は誰でも、オマーンに行かねばならない」。そして彼の言葉から「稼ぎが正しく導かなかった者は誰でも、オマーン(P. 147)安全でそこには不正もなく、圧政もない国に行かせよ。この事はその国の民の最も偉大な特性の1つである」。

また(預言者)彼に祝福と平安があらんことを、彼の言葉には「最後の時には、人々はそこに移住する様だ」と言うものもある。私は言った。「我々のこの時に、我々が未だにその時、それが現実のものになるのは何時かを待ち続けているこのハディースを承認する如く、既に人々はそこへと移住を始めた。つまり人々は集団で、個々人で、カタルやアブー・ダビーやドバイに、そして今オリエントの窓口であるマスカトやムトラフやその行政区へと移動している。つまり彼等は、彼等が最初の始まりであるが、イスラームやヨーロッパや、ペルシャの諸国の全てから、それからヨーロッパやアジアの様々な国から、前述のこの国を既に満たしていたのである。

神の使徒は言われた。「オマーンに住みたい者は誰であろうが、住ませよ。そこには富裕と言う満足と充足がある」。この事は、他の諸国の共同体に比べて、男でも女でも、オマーンの民の元で存在している。

アブドラー・ブン・サルマが、或る男が或る男に別れを告げているのを聞いた。つまり彼は彼に「貴方は何処に行きたいのか？」すると彼は言った。「オマーンへ行きたい」男は言った。「嗚呼、私の兄弟の息子よ、そこには真実がある。つまり正にそこには夜の安全と昼の安全がある」。その意味することは、その夜は、その昼の様に安全であり、その事に差異は無い、と言うことである。そしてその事から次の様相を呈している様に思われる。即ち人々がそこへと時の最後に当たり、スルターンや不正の協力者達や奥底に下った者達の圧政から逃れて、移住しているのだ。

彼は言った。「預言者によれば、彼は次の様に言われた。私の共同体は不信心となり、そして諸国において不正の協力者達が彼等を支配する様相を呈している」。即ち不正が支配する残りの諸国においてのことである。そして(不正の協力者達とは)法律を破り、例証(クルアーン)を拒否し、個人的見解に従い、諸勢力を神聖化する者達の事である。このことこそが不信心そのものである。つまり不信心とはそこから多神が生じるのであり、そこから恩寵を信じないことが生じるのである。

そしてこのハディースの最後において、人々はオマーンに避難する。そして正にオマーンは、その時に、それから伝承には欠落が生じている。そしてその最後に、その通り、とある。そして正にオマーンは最後の審判が近づく時に、それ(最後の審判の時)の崩壊時に長生きし、その住人が増えるのである。

「そして私の共同体は縮小し、果ては羊の休息地が売られ、人の椅子が10ディナールや20ディナールで売られるのである。それは出来もしないことなのである」。即ちその売買は人々の中で特別な者達以外は出来ないのである。(P. 148)そしてその事はその民の手に財産が多いことに由来する。そしてこの事から同様に、そこには生活の糧もあるのである。即ち(糧は)広くて得易いのである。彼は言った。「その人々は最も広範な安全を享受している。

そして彼等の（土地の）端においては海が波打ち、彼等の海から彼等の糧が来るのである」。別の伝承では、彼等の諸海とある。「そして彼等の夜は安全であり、彼等の昼は良い」

これらのハディースには現在明確になっていることがある。その例証の第一番目はオマーンの素晴らしさとその民の美德を規定した事である。隠しようもないことであるが、人心の誠実さや財産は、この現世の生活における恩寵の最も偉大なるもの1つである。

そして一方人々は稼ぎの容易さや食糧支援の簡便さを伴い、（これらは）神からその下僕達に対しての一番偉大な恩恵であるが、これがオマーンに存在していた。

これらのハディースは、伝承者や筆記者達の筆が、サヒーフ（アルブハーリー）におけるその記載を取り除いたのであった。つまりオマーンの諸偉業は、その業績を消滅させることを決めた無視の手がそれを無くさせたのである。しかしその流布は、現実がそれを目撃している。神に称賛あれ。

これらのハディースは、ニズワの人々の或る本において、オマーンにおける真理の男達の一人について述べていた。そして我々にとって、（核心から）遠い意味を含んでいることから、我々はそれ（ハディース）を奇妙に思っていた。

つまり日々が我々にその（ハディース）の意味を表明してくれたのである。イマームであったアルハーリー、神が彼に慈悲を垂れ給わんことを、彼の回答集の整理人がそれ（ハディース）を述べたのであった。彼はサーリム・ブン・ハムド・ブン・サルマーン・アルハーリシー翁あり、（この事は）彼が気付いた点の為であった。

そして疑い無いことには、オマーンの民は、貴方がこの書物において彼等の高貴なる行動に関してこれから見ることになる様に、あらゆる美德に参加しているのである。つまり（オマーン人の）唯一の教友であるマーゼン・ブン・グドゥーバ・アッサアディーが彼（神の使徒）に祈りを求めた時に、彼はオマーンの民の為に祈ったのである。そしてアブー・バクル、彼を神が嘉し給わんことを、彼も彼等の為に祈ったのであった。

イマームであるアッサーリミー、神が彼に慈悲を垂れ給わんことを、彼は言った。「そしてオマーンの民への、神の使徒の答えへと彼の後継者（カリフ）の祈りが現れた。そして神の言われた事は正しかった。彼等2人は彼等を前途有望であると見做していた。つまり彼等は人々の中で最も正しい道を歩み(p. 149)正鵠を射る者である。（そして）彼等から公平なる者達の導師達と真つ当な道を行く学者達が生じる。

そして彼等以外の敵が彼等を支配した事はなく、そして彼等の手から彼等の国が奪われたこともない。そしてたとえ或る者達が彼等の国を時々征服したとしても、神は信者達から（利益を）搾り取る事や不信者達を殲滅させる事を望まれていなかった。

つまり真理に対する彼等の祈りは未だに現れ続けているし、公正による彼等の歩みは目に見え、彼等の国家が、美德によって花開き続けている。そして彼等の中から高貴な学者達や徳の有る理知的な者達、修辞学に優れた説法者達が出て来るのである。

(オマーンの人々) 素性が知れ、そして彼等の望みが称賛された4人の男を伴って、既に使徒の教友達に参加している。

第1番目の人物は、マーゼン・ブン・グドゥバ・アッサアディー・アッタイー・アッサマーイリー師である。そして彼はイスラームの人物達の中の誰一の者として隠されようがない。

第2番目の人物は、カアブ・ブン・ブルシャ・アッターヒーであり、アルウーディーとして知られている。彼はペルシャの指導者達が預言者の元に、彼の情報を探り、彼の預言の真否を解き明かす為に派遣した人物であった。

そして彼は預言者の元にやって来て、彼の預言を知り、そして彼のメッセージに信頼を置いたのであった。即ち彼は諸啓典を読み、最も偉大な使徒の預言について知った者達の一人であった。それから彼は彼の民族の元に、ムハンマドの預言の正しさを持ち帰ったのであった。

そしてこの事は彼が彼等の元に到着した時のことであり、彼等は言った。「この事は王に我々が伝えたかった事である」。即ち彼等は上述のカアブの言葉の正しさを既に知っていたのである。それから彼はオマーンにおけるイスラームの布教者になった。

第3番目の人物は、スハール・ブン・アルアッバース・アルアブディーで、彼はオマーンの人々の中のアブドルカイス族の出自である。

第4番目の人物は、アブー・シャッダード・アルオマーニーで、彼は他の人々にとってはズンマーリーとして知られている。

彼はズンマールへやって来た。と言う訳で人々は彼に関して、アルオマーニー・アルズンマーリーと言っていた。「アルイスティアーブ」の著者や教友達、神が彼等を嘉みし給わんことを、彼等に関して記した人々の中で彼以外の者、彼等は彼について述べていた。たとえ彼等の敵対者達の中で否定する者達が、オマーンの人々の美德を否定したとしても、(P. 150) この事は歴史の地平線上において、日中の太陽の明らかな様に明らかな真実なのである。それを否認するのは真実に目を塞ぐ者以外にはいない。

そして神の使徒がその偉大なる称賛を持って称賛した者、それからアブー・バクル、神が彼を嘉し給わんことを、彼が大いなる称賛を持って称賛した者達、それからオマル・ブン・アルハッターブ、神が彼に慈悲を垂れ、そして彼を嘉し給わんことを、彼もまた然りである。そしてムハージル(メッカからの移住者)とアンサール(マディーナにおける前者の支援者)で満ち満ちた中におけるアンサール達の彼等に対する称賛等、これらのものより偉大なる徳とは何であろうか?

そしてそれ故に転換が生来の性質である(歴史の)時代にもかかわらず、彼等は真理の上に居続けたのである。つまりオマーンの人々は、彼等がイスラームに改宗して以来、彼等の宗教に揺らぐ事はなかった善行の人々であった。そして彼等は、約束や良心を欠損せず、そして彼等はイスラーム法の諸命令の中の何ものも決して改竄することもなか



った。寧ろそうではなく、彼等は真理の上で確固たる者達であった。そして彼（預言者）、彼に平安があらんことを、の遺言に従って、臼歯で歯ざしり（歯を食いしばりながら）正しい学派の上に居たのである。

オマル・ブン・バハル、彼はアルジャーヒズ（イスラーム史上著名な文学者）として知られているが、オマーンの民の徳を否定する者への返答として、次の様に言った。「恐らく知識を持たぬ者であろうが、その者がオマーンの民に証明（クルアーン）は何処から来たのか？と言っているのを私は聞いた。すると前述のアルジャーヒズが、この発言者に対して、彼を断定する様に反論して言った。

「彼には知識が無い。人々がある一つの地方に対して、（その地方）の人々に配慮する様に、雄弁家や修辞学者に配慮するであろうか？」

即ちオマーンの如く、一つの国の民に対しては、人々がオマーンの民に対して配慮する様なことはないのである。この事は、彼の有名な博学による、この唯一の世界の中でその民族に対する最も大いなる証言である。

それからアルジャーヒズはオマーンの民の様々な美德を述べ始めた。つまり彼は言った。「彼等—即ちオマーンの民—の中には、マスカラ・ブン・アッラキヤがいる。彼は人々の中で、立ち振る舞いでも、一人でも競合者としても、応じる者としても、基盤となる者としても、一番の雄弁家であった。即ちこれら全ての状況において、またそれに類する事において、彼は人々の中で一番の雄弁家であった。即ち彼等の中で一番語彙が広く、例証が彼等の中で一番早く、そして彼等の中で一番反論が力強かったのである。

彼（アルジャーヒズ）は言った。「彼の後には、彼の息子であるカルブ・ブン・マスカラがいる」。彼（アルジャーヒズ）言った。「そして彼等2人には（イスラーム以前の）ジャーヒリーヤにおける老婆とイスラームになってからの処女の雄弁がある」。

即ちこの2つの雄弁はジャーヒリーヤ時代において初期のアラブの人々の元で広まっていた。つまりアラブ人達はそれを伝播し合っていた。そして2番目（の雄弁）はイスラーム時代のものである。そして2つの雄弁はアラブの名士達の首が平伏す様な知識と文学素養を結集したものであった。そしてもしそれら2つの叙述が我々の元で長びくものでなければ、我々はそれらを（ここに）持っては来たであろう。（P. 151）しかし我々には違う目的がある。それは我々の著作において前進することを呼び掛けているのである。

アルジャーヒズは言った。「アブー・オベイダが次の様に言っている。我々はイスラームにおいてこの2つの様なものを聞いたことが無い。但しカイス・イブン・ハーリジャ・ブン・シナーンのダーヒス族の運搬用の雌駱駝（ジャーヒリーヤ時代にこの部族とアルグバラ族との間で雌駱駝を巡る40年に亘る抗争があった故事）について雄弁に述べたもので、既に諺にもなっているものを除いての事である」。

それは次の様なものである。カイスが2人の無知なる者の処にやって来た。この2人はハーリジャ・ブン・シャイバーンとハーリス・ブンアウフである。すると彼の息子の雌駱駝の尻が剣で殴打された。そして（カイスは）言った。「一体私とこの運搬用の雌駱駝がどうしたと言うのです。嗚呼、アイスマヤーン族よ。1000頭の駱駝から駱駝の目が

くり抜かれんことを（祈願文）」。人々は言った。「貴方はどうした、というのですか？」彼は言った。「個々の苛立っている者が満足し、個々の投宿する者が温かくもてなされんことを」。

彼（ジャーヒズ）は言った。「そして彼（カイス）は、太陽が昇ってから日が沈むまで雄弁を揮った。その中で絆を命じ、断絶を禁じた。そして（最後の審判の）結末と災いがもたらすものを恐れさせた」。

彼（ジャーヒズ）は言った。「人々は彼が朝から夜まで雄弁を揮った、と主張した」。すると彼等の中の一人が言った。「彼は彼（カイス）以外の事を述べている」。つまりもし彼が、太陽が沈むまで（雄弁を）行っていた、と言っても、彼はムッラ族の領域にいるカイスの如き者である（カイスは恋人のライラー・ビント・ムッラの居る地域で延々と詩を吟じていた）。彼（ジャーヒズ）は言った。「そしてそれはジャーヒリーヤ時代のカイスの雄弁である。そしてイスラームにおける人々の雄弁家はスヒヤーン・ブン・ワーイル・アルバーヒリーである」。

彼（ジャーヒズ）は言った。「オマーンの雄弁家達や学者達の中にスハール・アルアブディーがいる。アブー・イスハーク、彼はイブン・アルアバース・アルアブディーの事である」。私は言った。「彼は教友達の列挙で先んじた人物である」。

つまり彼はオマーン出身の3番目の教友である。アブー・イスハークは言った。「彼は預言者を理解した、と言われた」。彼に関しては3つのハディースが伝承されている。（或るハディースは）言った。「彼は我々の導師達の一人である」。そして翁、即ちアブダ・ムスリム・ブン・アビー・カリーマ、彼は文学に関する著作を為した最初の人物であり、そして彼には「アラブの格言集」において著作がある。

イブン・アンナディームは「索引」の中で彼について言及し、次の様に言った。「彼はイマームであるアビー・アッシュアサー・ジャービル・ブン・ザイドの一番特別な側近の一人であった。彼等2人に神が慈悲を垂れ給わんことを」。彼（ジャーヒズ）は言った。「オマーンの雄弁家達の中に、サアサア・ブン・スーハーン・ブン・ザイドと彼の兄弟がいる。彼等は雄弁な演説家であった」。私は言った。「サアサア・ブン・スーハーン・ブン・ザイドは、既に文学の碩学達や、そしてアラブの英雄達の間で際立っていた。そして彼の雄弁は未だに影響があり語り継がれている。碩学の学者達はそれを引用して、そしてそれによって著作は彩られている」。